

『天理に従って種をまく』

ホクレン農業協同組合連合会 代表理事専務

石川 治徳(いしかわ・はるのり)



略歴:昭和23年8月生。北海道大学卒業後、昭和47年ホクレン入会。昭和62年清水製糖工場土幌原料所長、昭和63年同工場農務課長、平成3年原料課長、平成6年食品企画課長、平成8年役員室次長、平成10年東京事務所長、平成13年帯広支所長、平成16年管理本部長、平成17年6月代表理事常務、平成23年6月代表理事専務、現在に至る。

私も系統経済団体であるホクレンに奉職して約40年。

温故知新ではないが、ホクレンの今日あることを鑑みると一人の大きな人物に出会うことになり、少し紹介したい。彼の人は、ホクレン会長として大きな基盤を作った小林篤一元会長(小林翁)である。

小林翁は明治23年兵庫県但馬の農村で生まれ、明治30年8歳の時父母と共に北海道浦河に渡り、21歳で今の峰延に入植している。

大正2年の大凶作を経て農民の立場を守るべく翌3年に25歳で産業組合を結成、以降組合系統運動一筋に闘い守り抜いてきている。

ホクレンの誕生は大正8年に小樽の地である。その時、30歳の小林翁は峰延産業組合組合長の立場で発起人となり北海道信用購買販売組合連合会(北聯)を設立、当時道内では300余りの組合があったが設立時はわずか8組合でのスタートであった。

大正15年に北聯専務に就任、以後紆余曲折はあるが50年近くにわたり、「小林のホクレン」と言われる程の深い仕事となっている。

昭和2年に北聯会長に就任、昭和15年に物価統制令違反容疑で収監され北聯会長を辞任、以降終戦まで町会議員、北海道農業会理事などを勤めていたが、昭和21年公職追放令により、全ての公職を辞している。

昭和28年に請われて北海道販売連合会会長として赤字の北販連を再建、翌29年10月に北販連、北購連の合併を行い、ここに「北海道経済農業協同組合連合会」が生まれ、これを「ホクレン農業協同組合連合会」略称「ホクレン」ということにしたが、これも「売買を中心とする事業を行う上で、相手方に楽に使ってもらえることが得策」という合理性の現れである。

戦後のホクレンにおける一大事業は、やはりビート工場の建設にある。

小林翁自身、「約60年に及んだ組合運動の中で最も苦労した事業は何か」と問われ、「やはりホクレンビート工場の建設だろな」と答えている。

ビート工場の建設認可に至るまでで一つの物語になるのだが、時の農相河野一郎に直談判して認可を取り付け、昭和33年に中斜里製糖工場の操業、昭和38年に清水製糖工場の操業を行っている。

昭和38年にホクレン会長退任、農民代表として参議院議員などを務め、昭和47年11月、83歳で逝去している。

小林翁は昭和13年頃に、報徳運動(二宮尊徳の教え)に出会い、それからの系統運動、組合経営のよりどころは報徳精神で一貫している。

小林翁の日常は自然流といえる生活信条で、村落の人達には「今様尊徳さん」と呼ばれ、北農連合会の役職員からは「和尚さん」の愛称をつけられていた。

ホクレン40周年史の小林会長の序からの抜粋であるが、「これからの農協は、組織体であると同時に、企業体でもあるのだから、この二つの均衡を、くずさないようにしなければならないと思う。すなわち、組織体の強化に一貫性をもつとともに、他産業との関連において、企業体としての機能を発揮し農家の社会的地位と経済の向上に、務めなければならないと考える。これからの農協の歩む道は、“人道に中庸が尊い”と同じように、“天理に従って種をまき、天理に逆らって草をとり、欲に従って家業に励み、欲を制して義務を思う”という道理を、運営の理念とすべきではないか」と考えている。」とある。

時代の変遷はあるが、系統運動の根幹は全く変わらないと認識している。小林翁の思想は、二宮尊徳による報徳精神に貫かれており、今の私達に大いなる指針となると思う。